
栄光の天使～Bridge between two worlds～

彼方

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

栄光の天使〜B r i d g e b e t w e e n t w o w o r l
d s〜

【Nコード】

N 2 9 5 9 W

【作者名】

彼方

【あらすじ】

人は言う「この世界には魔法などあるはずが無い」と。彼もまたその一人だった。しかしある日をきっかけに彼は異世界を訪れた。魔法や剣術を一ヶ月で覚えかなりの強さを得た彼。対悪魔ギルド『栄光の天使』の経営する学校に入学する。そこでたくさんの人との出会い、数々の戦いを通して彼を成長させる。そして現れる敵…迫り来る巨大な影…果たしてこの戦いの行く先はどこなのだろうか

プロローグ

彼は朝起きた。着替えをして朝食もとった。いつもどおりに。

しかし彼はまだこの日が特別な日になることは知らなかった。

ましてやこの日からこの先の人生が一変することになろうとは。

いや、その体はもうすでに異変を感じていたのかもしれない。

ずっとずっと前から…

そうこの世界に来てから……

目覚めの時を……

それは敵も同じ……

「あいつがそうなのか」

「ええ。かなり時間はかかりましたがとうとう見つけました。あいつでございます」

「そうかあいつがアレを持っているやつか。力が目覚めてしまう前に消してしまえ!!」

「分かりました・・・様。今から???をおくります許可を」

「ああ、良いだろう。さっさとやれ」

「了解」

プロローグ（後書き）

これは僕の処女作です。
おかしい部分が出てくるかもしれませんが。
言ってくればできる限りなおしますので
ぜひ書いてください。

1話 晴れた日に

結城彼方。来週に高校に入学する。別に特技もなく趣味もない、強いて言えばちよつと剣道部に入っていて県大会で優勝した、ということだけだ。友達も少なめの悲しいやつだ。春休みも終盤にさしかかり、宿題は終えてあるので、今日も特にやることなくグダグダな時間をすごしていた、はずだった。

「いつてきまゝす」

カナタは暇つぶしにと普通に散歩に出て行った。今日はいい天気だ。もう4時になっているため空が赤くなってきた。綺麗な夕焼けだ。

カナタは特に行くあてもなくぶらりと街中に入ってしまった。この町は中々大きく小さなビルも立ち並んでいる。スーパーなどにはこの時間になると買い物客が多くなる。大きな公園もあり子供達が元気に遊んでいる。カナタは公園で昼寝をすることにした。カナタは子供好きなので子供達を見ているのは楽しいのだ。こんな毎日もいいかもしれないそう思ったときだった。

「きゃー!!」

どこからか悲鳴が聞こえてきた。そして今カナタの目の前には現実離れした力で町で暴れまわっている男の人がいた。その男に町が無残にも破壊される。子供達は怖がって逃げられないようだ。こんなに大勢の子供達と逃げるのは無理だ。

カナタは固まって震えている子供達のところに行き

「これからあいつをひきつけるからその間に逃げるんだ! わかった

「？」

「お、お兄ちゃんは大丈夫なの？」

「大丈夫さすぐに逃げられる」

「…気をつけてね」

カナタは震える足を無理やり押さえつけ暴れる男を挑発し誘導を始めた。カナタは走って男を振り切ろうとしているのだ。誘いに乗った男はカナタについて来ていた。子供達はその間に逃げている。さっきの中学生ぐらいの少女がみんなを誘導していた。

カナタは子供達が逃げ終わったのを見届け裏路地に入り全力疾走を始めた。

逃げる、逃げる逃げる逃げる。どれくらい逃げただろうか。体力は同じくらいのように全く差ができない。くそいつまで付いて来るんだ。と悪態をついたとき

カナタはこけた……

（死んだ……）

そうカナタは確信し、数少なかった人生を振り返った。

あんなことやこんなこともまだしていないのに！

と……そのときカナタの体の中で何かがはじけた。そう感じた瞬間、無意識にこう言った

「ファイアボール！」

すると突然人の頭ぐらいの大きさの炎の玉ができてその男に向かって飛んでいった。

「ぐああ」

男は当たり吹っ飛んでいった。

「これは、いったい？」

そこで足音が響いた。誰もいないだけにカツン、カツンとはっきり町に響く

「彼方あ、魔法だよ。聞いたことがあんだろ？」

カナタの父、理^{リオン}穩だった。

「魔法？あれは幻想だろ！？何でつかえんだよ！」

「魔法はあるよ実際にお前も見たら。そして使ったろ」

「でもよお…」

そこでさっきふっ飛んでったやつが起き上がりまた向かってきた。
あれほどの炎をくらったのにまだなんともないようだ。

「彼方そんなに信じらんねえんだったら見せてやるよ
Das Feuer Gottes Receive (炎は神に
もらった)

Mensch Weisheit (人間の知恵)
es brant die Gottes der Flamme (燃えろ神の炎で)

———神炎」

男は青白い炎に包まれた。苦悶の声を上げた男はしばらくすると炎に身を焼かれ跡形もなく消滅した。

カナタは信じられない光景を見て呆然としていた。リオンの使ったのも魔法……とても信じられなかったのだ。

「彼方、帰るぞ」

そんな言葉で我に返ったがすべて整理できているわけではない

「父さん、さっきのはなんだったんだ？」

「だから魔法だといっているだろう」

リオンは歩き始めた。カナタもリオンの後を追っていった。カナタは不安で仕方がなかった。

これからどうなってしまうのか……と……

く家く

カナタには母さんはいなく、リオンと二人暮らしをしている。

母さんは事故で死んでしまったらしい。らしいというのはカナタが生まれてすぐだったから覚えていないのだ。

家に着きいすに向かい合って座った。リオンは話す内容をまとめている様だった。しばらくしてリオンが重い口を開いた。

リオン「彼方。今から全てを話そう」

そういつてリオンは話し始めた。

リオン「魔法とは言葉を使い、世界で起こった現象を具現化したものだ。

さらにそれを応用した物もある。体内に魔力がなければこれは発動しないが彼方はもうつかったからあることは分かっているはず。人はそれぞれ魔法を持っていてその魔法の属性しか使えん。

俺の場合は火と土属性だ。だがお前は特別だった。お前はな特殊な魔法を使えるらしい。

さっきのあいつはその力を持つお前を殺すため送り込まれてきた悪魔だった。もともとこっちに来たのは特別なお前を隠すためだった。しかし悪魔にばれた以上こっちの世界にいたら危険だ。だから今からレーヴァンに行くことにする。学校は向こうの魔法学校に入ることになる。以上だ」

「……以上だ、って後半意味わかんなかったんだけど！引越すってこと！？僕って狙われてるの！？つか俺の魔法ってチートなの！？今から行くってどうやって！？」

「まあそういうことだ。準備しろよ」

「そうゆうことってどうゆうことだよ！！？」

「じゃあ行くぞ」

そういつてリオンは荷物をまとめ始めた

1話 晴れた日に（後書き）

最初のうちは余裕があるので3話くらいまで連日投稿しようと思います。

よろしくおねがいします。

誤字脱字などがあったら言ってください。

…文章力がほしいです…

2話 訪れた世界

レーヴァン

カナタはレーヴァンに来ていた。レーヴァンに来るために門をくぐったのだが、それがあつたのは以外にもカナタの家の近くにある神社だった。（全然気がつかなかった）神社でリオンがなにやら変な呪文を唱えたかと思うと門が現れそこに入ったらここに来ていたのだ。

カナタは改めて魔法を実感した。この世界がおかしいのだ。なぜか島は浮いているし、見たことない生き物いる。そしてカナタは力がみなぎるような感覚もあった。リオンはこっちの世界の人らしいから全く驚いたりしておらず、いたって普通のようなだった。

……アレ学校ってどうすんだろ

そんなことをカナタが考えていると

「学校ならもう手続きしてあるはずだ。入学は来月だからあせるな」

（なぜ思ったこと分かった？ まあいいや）

カナタが声に出して考えていたからです

「学校に入ってくるやつ等は、ある程度魔法使えるやつらだけだから明日から特訓するから 早く寝ておかないときついぞ」

「うっし、特訓のために寝る。おやすみ」

「おう、俺も寝るか」

寝るには早すぎる時間だが気にしない。カナタは一人だけが魔法を使えないのは嫌なのだ。そんなんではこの先の学校生活やっていない、と。カナタは家の中に入ると寝室に向かった。

「……ガバッ

寝れるわけあるかー！！！！まだ5時だぞ。いつもならご飯も食った……」

「うるさい」

カナタは眠れるはずもなくしばらくは音楽を聴いていた。

この世界はもとの世界と違い電気や火は魔法で全てまかっていた。一般家庭で使われるような魔法は魔結晶と言われる水晶に魔力を閉じ込められていて

誰でも魔力を使うことなく簡単に魔法を使うことができるようになっていた。

カナタのいるこの家は結構大きかった。が15年もほったらかしにしていたせいか、かなりボロく見えてしまう。

カナタは音楽を聴いている間に睡魔がやってきていつの間にか眠っていた

「????」

「なに！しくじっただと！」

「申し訳ございません。侮っております。下級の悪魔を送ったの

ですが……」

「ツチ、あいつか。学校に入られたら手が出せなくなったではないか」

「申し訳ございませんでした。今一度チャンスを」

「まあ良いきさ。だが次はないと思え」

「ありがとうございます、……様」

「下がれ」

少しずつ悪の間の手が迫り来るのだった

く家の庭く

「うわあああああああ……!!」

カナタは今、全力で逃げている……リオンから……

リオンがいきなり『まず今日は攻撃を避ける練習からだ』とかなんか言って。いきなり攻撃してきた。

「わっと危ないだろ！」

今かすったし、そうゆうわけで……て言うか素人相手に真剣は無いかと

「そんな甘いこと言ってられるかあ!!」

そこで

「ぶべえ」

（こけたあー!!死ぬ!つかデジャブ?これデジャブ!?)

デジャブです

「死ねえ、うるあああ!」

「ぐべえ!」

起きて走ろうとしたところを後ろから切られた。

（あれ切れてない?）

「?もともと木刀だぞ?真剣でやったら死ぬだろお前」

（……何…木刀だっただと明らかに真剣に…ハッそうかオーラがやばかったから僕が真剣に見間違えただけ。ようは錯覚。セーフ。マジ死んだと思った。真剣じゃなかったら死ぬこたあないか。）

「次は真剣だぞ」

「ぎゃああああああ!」

「うっさい行くぞ」

「……はい」

リオンはカナタを殺す気のようにです。その後も攻撃を避ける練習は続きました。

やっと解放されたときには昨日と同じ5時だった。

この日が終わるころにはなかなかうまく避けられるようになってきた

リオンはまだまだ序の口だと言う

カナタは生きていけるのだろうか……

カナタⅡアクリム（結城彼方） ♂ 15歳

今年から魔法学校に入学した。剣技の腕は中々。悪魔に狙われ始めレーヴァンに行く。魔法は「世界」と言うとても特殊な魔法を使う。友達は少なかったが別に気にしてはいなかった。結構ポジティブな性格。

身長168cm

体重54kg

リオンⅡアクリム（結城理穂） ♂ 40歳

カナタの父親火と土の属性を使う。学校の先生。意外と熱血でカナタと特訓したときはかなりのスパルタだった。属性は「火」と「土」を使う。

身長185cm

体重
76 kg

3話 彼の魔法は

（翌日、家の庭）

今日は魔法だそうだ。

「まず魔法の説明をする。

前に言ったとおり魔法とは言葉を使い世界の記憶から世界で起きたことを具現化させることだ。それを応用した物もある。魔法の属性は生まれたときにはすでに体に宿っている属性しか使えない。俺の場合火と土だから火と土系の魔法しか使えない。魔法の位は詠唱の長さで決まる。書いたときに一行になるのが下級、二行が中級、三行が上級、四行が究極、六行から七行が終焉の魔法、エンドマジック、八行以上が人を超越した魔法、レグニムマジックだ。エンドとレグニムは一人一人違ってこれは自分で見つけるしかない。見つけられずに一生を終える者が多い。

次がお前の魔法だ。お前の魔法は実は見た魔法を覚えて使うことができる魔法。いわゆるコピーの魔法だ。一回でも見れば使えるようになる。物は試した昨日俺がやった魔法をやってみろ。アレは上級魔法で魔力を多く消費するが、お前はまあ容易に撃てるはずだ。ほれっ」

「お、おう……あれ覚えてないんだけど……」

一回で覚えられたら逆におかしい。それもあんな日本語ではない物を1発で覚えられるわけが無い

「なに一回見たら覚えておけ！特別にもう一回だけやってやる

Das Feuer Gottes Receive（火は神に

もらった)

Mensch Weisheit (人間の力)

esbrannte Gottes der Flamme (

燃えろ神の炎で)

——神炎」

そういうと以前同様の炎が現れるのを焼いた。

「わかったか？ やってみろ」

「はい。え」と

Das Feuer Gottes Receive (火は神に

貫いし)

Mensch Weisheit (人間の力)

esbrannte Gottes der Flamme (

燃え尽きろ神の炎で)

——神炎」

父のよりは炎は小さいが魔法を放つことができた。

「おゝマジでできるんだ」

「よし分かったか。これがお前の魔法だ。それと最後にお前とその魔法の秘密教える。それは……………」

……………わかったか？ これは強力だが代償も大きい。使う場面を見極めることだ。どうしても使わなければならなくなったときだけ使え。これからはいろんな魔法を放つから見て覚えろ」

そう言って父はいろんな魔法を教えてくれた

たまに知り合いの魔法使いなども呼んでカナタは雷と風の魔法を主^{おも}に見せてもらった

入学式10日前、家の庭

僕は剣術、魔術、学力をみっちりしごかれかなりできるようになっていた。

父は前はもっと優しかったのにここまでスパルタだとは……

「Gehe So（火よ行け）

——ファイアボール」

あの日初めて使った魔法だ。これは下級魔法。弱いが魔力をあまり使わず大量に使うことができる。あの日は詠唱破棄を無意識に使っていた。威力は落ちていたはずなのだがまだあれほどの威力を出せていない。人は命の危険に迫ると通常以上の力を出せると言うのは本当のようだ。火事場の馬鹿力というわけだ。

「まだまだだな。だがここまでよくがんばったな」

（もしかして特訓終わり？あと10日残っているのに？）

「これからは他にも魔法を教えてやろう。フッフ特訓はまだ終わらんぞ」

「ですよ〜」

それから10日はさらに地獄のような特訓が待っていた。

：がカナタはそれ乗り越えた。魔法は何回も使うだけだった。剣は剣道をやっていたから良かったのだと思う。勉強はあまり得意ではないが暗記が得意だったから大丈夫だった。

そしてついに明日は入学式。

（ついにあのスパルタ親父から逃れられるのだ！あのスパルタ親父から逃れられるのだ！大事なことなので2回いいましたっ。学校は寮だからね。家に帰らなくて良いんだよね！！）

「…ん？言ってなかったか？俺は学校の教員だぞ」

「嘘だあああああ！！」

カナタが嬉しそうにしているのを見て察したのかリオンはそう言うて来た。カナタは膝を地面につけガックリしていた。

「ああついでに言っておくが、お前苗字、結城じゃないぞ。この世界じゃお前はカナタⅡアクリムだぞ」

（厨二っぽい名前っーか父さんの名前リオンⅡアクリム？だから外国人っぽい名前だったのか。納得納得。じゃねえアクリムって何だよめっちゃめっちゃ恥ずk「何だ？人の名前にケチつけんのか？」イエ、メッソウモゴザイマセン）

「それにこつちじゃあこんなの当たり前だ。結城彼方のほうが恥ずかしいぞ」

今日は明日のこともあるので早めに特訓を切り上げ寝ることになった。

3話 彼の魔法は（後書き）

今回で連続投稿は終わりです。

次からは10日に一回ぐらいの投稿になると思います。
完結できるようがんばるんでよろしくお願いします。

4話 魔法学校へ

（ふははは今日は入学式なのだ。あの父さんといスパルタ親父からおさらばできるのだこんなうれしいことはn「俺は教師だと言っているだろうが」ああ忘れていた……）

く校門く

待ち望んだ高校生活だ。どこを見ても友達と話している人たちばかり……

（グスン、友達作ろかな。）

カナタが周りを見渡すと、一人うつむいている少女が。

カナタは心配になったので近寄って声をかける。なんてお人好し。

…これがカナタです。

「こんにちは」

「あ…こんにちは」

「君どうしたの？」

「？どうしたってなにがですか？」

彼女はどうして声をかけられたのか分からなかったようだ。まあ普通自分が下を向いているだけで声がかかるとは思わないだろう。

「君が一人で下を見ていたからさ」

「私、ここに来たばかりなんです。だから友達いない…いつも一人なんです」

「じゃあ僕と友達になろう」

「いいんですか？」

「うん。僕もここに來たのが最近で友達いないから。僕はカナタ。結いやカナタⅡアクリム。よろしく」

「私はフィーリアⅡエンポート。よろしくお願いします」

そう言うとき彼女は笑顔になった。カナタの初めての友達だ。フィーリアもうれしそうだ。

「笑顔の方がかわいいな」

カナタはボソツとつぶやいた。これは思っていたことだったが声に出してしまった。

「っくそんなこといわれたの初めてです。ありがとうございます」

フィーリアは顔を赤らめて照れている。

「え？あ、声に出た？この癖、直さなきゃな」

「カナタ、そろそろ入学式が始まるみたい」

「そうだね。じゃあ行こうか」

カナタ達は指定された席にそれぞれ向かった

（体育館）

「これより第1372回入学式を始めます」

多っ。どんだけ歴史があるんだこの学校。

……校長の挨拶が始まったようだ。

「入学制諸君入学おめでとう。まず諸君にこの学校の説明をしておこう。この学校は対悪魔ギルド『グロリーエンジェル栄光の天使』の運営する学校だ。私はゼノンカルディアⅡアルカレイドだ。ギルドの10階級の最上位に位置する全天王でこの学校の校長を務める。この学校に入った時点で君たちは階級最下位の天使になったわけだ。これからの三年間、力を付けるためにがんばってくれ。遠征での活躍によって階級を上げることできる。そして学校を卒業した後、我が『グロリーエンジェル栄光の天使』で活躍することを祈っている。」

（うわーなんかかなり初耳のことがあったぞ。父さんこういうのは事前に説明を…）

ちなみに階級は下から天使、エンジェル大天使、アークエンジェル権天使、プリンパリティ能天使、パワー力天使、ヴァーチャード主天使、ミニオン座天使、ソロネ智天使、ケルプ熾天使、セラフそして全ての天使を束ねる全天王の10階級あるとこのパンフに書いてある。カナタが式が始まる前に目を通さないから……ふむふむ、全天王は1人だけしかない。熾天使の中には「4大天使」と呼ばれるものがあり熾天使の中でも特に強い魔法を持つ4人がそう呼ばれるらしい。この学校を卒業すると階級がひとつ上がり、ギルドで依頼を受けることができるようになる。

「では教室に向かってください」

カナタは確か1年2組だったよな。
クラスはどんな人がいるんだろう

「1の2の教室」

カナタのクラスは1年2組だ。フィーリアと同じクラスだったから良かった。教室はまんま前の世界のままでした。代わりばえもなく全くつま……馴染みやすい。

「私はこのクラスの担任を務めるケインⅡゲンドゥだよろしく頼むえいこれからの予定を発表する。今日はもう寮に帰って終わりだ。夕食は各自食堂でとってくれ。明日からは二日間模擬戦をしてその次の日から授業が始まる。以上解散」

リオンと同じタイプでした。大丈夫か？まあ寮に行くかクラスが同じ人と2人部屋になっているらしいから仲良くしないと。カナタの部屋はつと167号室だな。1年は400人らしいから全部で200号室まである

これが3学年もあるのか。カナタの行こうとしていた高校よりも多いな。この学校は有名なのだろうか？

フィーリアⅡエンポート♀ 15歳 天使 エンジェル

カナタと同じく今年から魔法学校に入学した。父は剣術の師範のため剣術に長けている。恥ずかしがりや。カナタの最初の友達。学校に来るまでは友達がいなく寂しかったらしい。

身長158cm
体重??

ケイン||ゲンドウ♂ 42歳 1年2組 ヴァーチャ力天使

1年2組の担任の教師。主に剣技を教える。魔法は火属性が使える。
熱血教師。カナタの父と同じような性格をしている。

身長180cm
体重79kg

4話 魔法学校へ（後書き）

やっと学校だ。…やっともないか……
まあストーリー重視なんであまり学校の生活は載せられないと思います。

勘弁してください。ネタが無いんです

感想待ってます

5話 チーム結成（前書き）

3連休ということで投稿です。
来週も3連休なので上げるつもりです。
感想よろしくおねがいします。

5話 チーム結成

く寮く

カナタの部屋は結構広く、ゆったりできそうだ。カナタのルームメイトは…もう来ているようだ。

「来たか。俺はクロウⅡメイガンだ。これからよろしくな」

「僕はカナタⅡアクリム。よろしく」

見た目は剣が強そうだ。カナタより身長が少し高い。顔も整っている。いわゆるイケメンだ。

「カナタは飯どうする？」

「朝知り合った女の子を誘っていくつもりだけど……君も来る？」

「おお、そうじゃあ一緒に行くとするか」

そういつてカナタは食堂に向かった。食堂は一階にある
く食堂く

「あ…カナタ！」

「フィーリア。どうだった？」

「寮で友達ができました」

「私はシャルルⅡアリメル。よろしく」

「僕はカナタⅡアクリム。よろしく。君たちも僕らと一緒に食事しない？」

「じゃあ一緒に食べよう。な、フィー」

「じゃあ行こうかあっちでクロウも待ってる」

僕らはわいわいしゃべりながら食事をした。

しゃべっているとクロウはとても気が合いそうだった。

フィーリアはとても静かだったが笑っていた。

シャルルはとても元気だった。フィーリアとはすぐ打ち解けられたようだ。

楽しい食事を終えそれぞれ寮に戻っていった。

明日の学校に備えて早めに寝ることにしたのだ

明日は7時半に食堂で食べようということになった。

く寮・フィーリアく

おはようございます。今日はフィーリアは早く起きてました。昨日は色々ありました。カナタに初めての友達ができました。フィーリアです。それにシャルルとクロウも。とてもうれしかったです。

あゝシャルルが起きてきた。

「シャルル、おはようございます」

「ふあゝあ、おはようゝフィー」

フィーリアのあだ名はフィーで決まったようです。これはカナタも

変なあだなを付けられそうだ。

「シャルル食堂いこ」

「じゃあ行こう」

着替えも終わりフィーリア達は食堂に向かった
食堂

「おはようフィーリア」

「おはようございますカナタ」

ちょうどカナタたちが来たところでした。

ここの食堂のメニューはサンドウィッチやスープなどの洋風が多い
ようだ

今日もみんなでしゃべりながら食事をした。

教室

確か今日は授業です。ケイン先生がきました。

「今日、明日は模擬戦をする。4人一組の団体戦だからまず4人組
を作れ。言っておくが今後の授業も今回のチームでするからな。ち
なみに今回の模擬戦は試合の内容で順位が付くからな」

かなりいきなりですね。まあ模擬戦があるとは言っていたが。

「僕はクロウとんだけど、フィーリアとシャルルも一緒にくまな

い？」

カナタはフィーリア達を誘った。他に知り合いもいなかったし人数的にもちょうど良かったからだ。

「！良いよねフィー」

シャルルは良いようだ。フィーリアに確認を取っている。
ふいーリアも断る理由はないようで――

「はい、もちろん。よろしくおねがいします」

と了解してくれた。

「じゃあこれで俺達のところはきまりだな」

しばらくすると他のところも決まったようだ。次第にまとまりができて始めている。頃合を見計らってケインが口を開いた。

「よし、決まったようだな。じゃあさっきも言ったように今日と明日は1学年全体で模擬戦をする。ルールは一人ずつ出て戦って3勝したほうが勝ちだ。2対2になったら大将がもう一度戦って決める。トーナメント式で組み合わせは一時間後に発表する。試合開始はその十分後だ。武器は各自準備しておけ。武器は武器庫にあるからそれを使い。優勝賞品は武器をもらえるらしいぞ。まあ武器庫で選んだ武器も貰えるんだがな。じゃあ今から作戦タイムだ。みんながんばれよ」

武器を貰えるのか。この学校もすごいな。常に武器携帯ありだもんね

「じゃあどうする？大将誰するの？」

「ジャンケンで良いんじゃないね」

「じゃあやるよ最初はグージャンケンポン」

ファイリアーパー

シャルルパー

クロウグー

カナタグー

カナタとクロウが負けです。大将はどっちでしょう

「な…何…」

「くそっじゃあ行くぞ」

「「最初はグージャンケンポン！！！」」

「つつつつしゃああああああ！！！」

「まじかよおおおお！大将とか無理だし！！！」

カナタが負けたようです。

カナタなら大丈夫でしょう

…たぶん

「クッククク男に二言はないのだよカナタクン」

「くそ！！！」

「じゃあ俺は先鋒で」

「じゃあ私は次鋒で」

「じゃあ私は中堅でしようか？」

「そうだよ。」

「じゃあそういうことで」

「決定かよ」

それで確定したようだ。大将以外はすんなり決まったな。まあ大将以外はそこまで重要な役目じゃないしね。

「じゃあ次は作戦か」

「作戦は必要でしようか」

みんな勝つだけでは？作戦って言ってもどうせ戦うのは一人ずつだし順番しか作戦練らなくてもいいはずだが…

「確かにいらないかも」

「じゃあ作戦はみんなで勝つってことで」

「うん、それでいいんじゃないか」

「じゃー決定ー！」

作戦になっていないがな

「じゃあ先生に言ってくる」

そういつてカナタはチームの登録をしに行った。登録は大将がすると決まっている。他のチームはまだ何か話し合っていたのでカナタ達が最初だったようだ。

「うちのチームは2－1だそうだ。」

「ウッシ武器でも見に行くか！」

武器庫は別館にあるため校舎を出て少し歩かなければならない。カナタ達は武器を貰うべく武器庫に向かって歩き出した。

クロウⅡメイガン♂ 15歳 1年2組

カナタ達と同じく今年から魔法学校に入学した。魔法は力の属性を使う。カナタとはルームメイトで友達になる。ルームメイトでありチームメイトでもある。大剣を昔から振っていたこともあり、大剣の扱いには慣れている。

身長176cm

体重66kg

シャルルⅡアリメル♀ 15歳 1年2組 カナタ達と同じく今年から魔法学校に入学した。カナタ達と同じクラスでフィーリアと同

じ寮である。武器は二丁拳銃と鞭を使う。両方なかなかうまく使え
る。

身長165cm

体重??

6話 皆の武器は

武器庫へ

カナタ達は今武器庫に来ている、が予想以上に武器庫が大きかった。体育館の三分の二くらいはある。他にも生徒がいるので早くしないといけないがとられるという心配はしなくていいようだ。武器は種類別の棚に分けられていてどこにあるか分かりやすくなっていた。高さもあるがはしごなどがかけられている。

「じゃあ選ぶか」

カナタがそういったのをきっかけにみんなは探し始めた。

クロウの武器は決まっている。クロウは大剣だここに来るとき家に置いてきたが俺は昔から大剣を振ってきたのだ。結構うまく扱える

「お…あつた、あつた」

クロウの目当てとする大剣のある場所に着いたようだ。これだけの広さがあるため、かなりの数の大剣がある。

「いい大剣だ。これに決まりだ」

いいのが見つかったようだ。

クロウは大剣を背負いあらかじめ決めておいた集合場所に向かった

シャルルは鞭なら持ったことがある。シャルルは鞭を見つけたようだ。

「よし、これだ！」

シャルルは迷うことなく1つの鞭を手にした。
その後シャルルは拳銃も見つけたようだ。

「じゃあ銃も二丁ほど…」

そういうとシャルルは足に拳銃二つつけて、腰には
鞭は腰つけた

（フツ、完璧だ）

シャルルはとても満足そうな顔をして集合場所に歩いていった

フィーリアはどうだろうか

フィーリアは悩んでいた。いつもどおりに片手半剣でいいものか、と
しばらく考え込んだ後フィーリアは結論を出したようです

「いや、悩むのはなしです。片手半剣にします！」

「おう、どうした？」

カナタが近くにいました。結構な大声だったから結構恥ずかしいだろう

「気にしないでください！」

フィーリアはそういうとプイとカナタから顔をそらした。かなり顔
が赤くなっている。

「おう？わかった？」

なんで疑問形なんだ。まあ良いか。フリーリアは1つの片手半剣を手にした。それに決めたようだ。

「じゃあ先に戻っています」とカナタに言った後集合場所にむかった。

最後はカナタだ

カナタもう決まっているようだ

父にしごかれた時に使っていた双刀と太刀だ。双刀のジャンルはな
いことはなかったが、珍しいのかかなり奥行かないとなかった。
カナタにはどれが良いのか見分ける力がないために勘で決めた

太刀はその近くにあった。これも勘で決めていた

「これか、そうだなこれでいいか」

双刀を腰につけ太刀を背負って：

「じゃあ決まったことだしみんなのどこに行くか」

そういつて集合場所に向かった

カナタが集合場所に行ったときにはもうみんなとっくに来ていた

「ごめーん、待ったー？」

「大丈夫ですよ。それよりカナタは装備多いですね」

双刀に太刀だからそりゃあ多いわ。

「いいのいいのこれが僕の装備。それにクロウもすごいのも持ってたな」

「おうこれが良いんだよ」

「それにシャルルだって3つ武器があるじゃないか」

「私のは小さいよ」

「まあそうか……お、そろそろトーナメント発表だぞ」

「じゃあ行くか」

カナタ達はそういつて武器庫から出てトーナメントを見に行った。まだ知っている人がいないからどこでも良いけど場所だけは確認しないとイケないから

く廊下の掲示板前く

人がゴミのようだ。ふははははh…ごめんなさいやってみたかったです。

トーナメント発表を見に行ったカナタ達の前には人ごみが…結構小さめの掲示板に貼ってあるので少ししかいなくても見づらいのにここには軽く見積っても30人ぐらいいる。先生ももっと貼る場所考えろよ

「あゝ多いから私見てくるよ」

「いいのか？ここ行くの大変だぞ」

「私小さいから大丈夫。じゃあ待ってて」

そういつて人ごみに突っ込んだ。シャルルに身長は平気よりも小さいめなので入っていきやすいそうだ

「！！Aの1番目！」

見えた様だ。1番と言うことは最初の試合と言うことだ。

「カナタ順番はAの1だった。早く行かないと」

「マジかじゃあ急ぐぞAはどこでやるんだ？」

「Aの試合はそこの第一実習室です」

（実習室）

試合はそれぞれ1つの部屋を使い一試合する。部屋の広さは20×20の正方形の部屋で両側にはベンチが付けられている。床は石のタイルになっていて安定しているが、衝撃を吸収できないと言うデメリットもある。

「両チーム準備してください」

「よし最初は俺からだな」

まず最初は先鋒のクロウだ。張り切っている

「がんばって僕の前で試合終わらしちゃって」

「おう、すぐ終わらせ！」

そう言ってクロウはベンチから出て行った。

6話 皆の武器は（後書き）

次は10月3日に上げる予定です。
よろしく願います。

感想待ってます

7話 模擬戦開始（前書き）

初めて書く戦闘シーンだったのでうまく書けていませんがよろしく
お願いします。今回はいつもより長めです。

アドバイスが欲しいので感想お願いします。

7話 模擬戦開始

「第一試合、実習室」

模擬戦が始まった。最初はクロウだ。

相手の小柄の生徒だ得物は片手半剣すばしっこそうだ

「両者試合を始めてください」

それと同時にクロウは走り相手との間合いを詰めた。相手は剣を抜き構えている。

走ってきた勢いを使って力いっぱい剣を振り下ろした――

「お疲れ、流石だね」

結果はそれで決まってしまった。相手は避けようとしたが間に合わずその斬撃をくらって倒れたのだ。クロウは審判に試合終了の合図を出してもらいフィールドから出てきた。

「次はがんばれよシャルル」

「負けないよ」

そういつてシャルルは出て行った。

「試合を始めてください」

相手はさっきと同じような人だった。武器もやはり片手半剣。

シャルルは試合が始まると銃をとりだした。銃は使い勝手がいい。威力はまあまあだが魔力を弾にして銃にため撃つので弾切れを起こしても魔力をこめればまた撃てる。だから魔力が切れるまで撃ち続けられる。それに燃費もいいから相当の量を撃つことができるのだ。そのため銃を扱う人も少なくは無い。シャルルは両手の銃に魔力をこめた。

相手はシャルルが魔力を銃にこめているとわかったのか、弾かれたように走り出した。

（わっ。走ってきた。まあ魔力をこめているとわかっているのに黙って見ている人はいないよね。私も逃げないと！）

シャルルはそう思って向かってくる相手から逃げ出した。

「ちょ、お前。逃げるな！戦え！！」

そう相手はいつてくる。シャルルは十分に魔力が銃にたまったのを確認すると突然振り返った。

「もう逃げないよっ。さあ私の弾を全部防げるかな？無理だけどねっ！」

「何っ！くっ。た、弾が多いっ！！ぐっ！がはっ！」

シャルルは両手に持つ拳銃を相手に向け連射した。相手は最初は何とか防いでいたようだがそれにも限界が来たようだ次第に当たり始めた。そして

「くそっ！これ以上は！！ぐあああ！！！！」

ついにシャルルの弾を防げなくなったのだ。相手はついに倒れたのだ。審判に勝利の判定をされると、

「よし。勝ったよー！」

そいいながらこっちに向かって走ってきた。

さっきのクロウの大剣もだがみんなの武器には人を殺さないように魔法がかけられている。こんな模擬戦で死者が出たら殺した本人の後味が悪いし、学校側としてもそれは避けたいのだろう。

今回の試合もクロウ同様、シャルルの勝利で終わった。

「おつかれ」

「うん、次はフィーだよ。がんばってね」

「うん、がんばってきます」

そういつてフィーも試合に行った

フィーリアの相手は……なんか同じような人しかない……
顔もそっくりだが武器も戦い方も似ている。あいつらは四つ子なのかと思うくらいそっくりだ

「それでは試合を始めてください」

相手はいきなり剣を抜いて切りかかってきた。フィーリアも剣を抜ききりかかる剣を紙一重でよけた。そして右足を踏み込み下から切り上げる。一回はじかれるが二回目ははじかれることなく相手にあたた

「試合終了」

「お疲れ〜フィーリア強かったんだな。びっくりしたよ」

「……うちのお父さんが剣術の師範なので……」

「そうなんだ。どうりで強いわけだ。あの身のこなしは相当練習しないとできないもんね。っと次もがんばろう。僕の出番ないきがするけど……」

「そ、そうですね」

相手はとぼとぼと退場して行った。

次の二回戦もここでやるらしく、次の対戦相手が入ってきた

「では第二試合を行います。先鋒は前へ」

（第二回戦）

まず1回戦と同じようにクロウが出て行った。クロウの相手は同じ大剣使いのようだ。

試合が開始されると同時にクロウは走り出した。前と同じ戦法だ（戦法といえるかは謎だが）。そして上から剣を振り下ろした。剣の先が相手を捕らえる寸前、相手の剣の腹が受け止めた。だがクロウは剣を引くと大剣とは思えないような速さで横から切った。相手はこれは防ぐことができずにくらってしまった。これでまたクロウの勝利が決まった。

ベンチに戻り一言、二言言葉を交わすと次のシャルルが出て行った。

試合開始の合図が出されるとシャルルはいきなり魔法を使った。相手の攻撃があたらない。と言うか当たる寸前で何かに当たって防がれる。

「くそっ！ 攻撃が当たらない！！これは何の魔法なんだ！」

相手は戸惑っている。そこへシャルルは腰にある鞭で敵を打って倒した。とても得意げな表情をしていた。

次はフィーリアだ。

シャルルも魔法使ったのでフィーリアも少し本気で行くようだ。

「それでは試合を始めてください」

フィーリアの父が教える剣技新月流の技は見えない早業であることからその名が付いた。フィーリアはそれを使うようだ。

「新月流剣技居合い——残月」

新月流でも特殊な居合いですね。この技は相手を通りすぎるときに剣を抜き、相手を切り、鞘に剣をしまう動作を一瞬でする剣技。そもそも足の速いフィーリアは相手の攻撃を避けてこの技を放ったのだ。抜刀状態からする残月もあるがそれより納刀状態からの居合いの残月の方が威力は高くなる。

この後の試合もすべて前の三人で終わってしまったのでカナタに一番はありませんでした。

それにしてもこの学校の生徒は猪突猛進しかないんでだろうか？ さっきから突進する人が以上に多いんですけど…

明日は準決勝、決勝があり相手も相当強くなるはず…
そしてカナタの出番も…

〽翌日、準決勝〽

準決勝にして初めてカナタのチームが1回負けた。シャルルが負けてしまったのだ。シャルルは負けてしまった責任を感じてかなり気持ちが沈んでしまっている。

「シャルル、そう落ち込むな。負けることは誰にでもある。そうやっていつまでも落ち込んでいることはダメだと思うぞ。元気を出せ。次で取り返せばいいことじゃないか」

「カナタ…ありがとう。うん、元気が出たよ。もう大丈夫！よしフィーを応援するぞ！フィーがんばれ」

「まあ僕はこれぐらいしか言ってやれないからな。次の決勝がんばろうな」

シャルルはカナタの言葉で元氣を取り戻したようだ。
一方フィーリアはシャルルの仇と言わんばかりにはりきっている。

「試合を始めてください」

フィーリアは剣を抜かず魔法を唱え始めた。フィーリアの出す初めての魔法だ。

「Space Allocated (空間を割り)」

At the cleft (裂け目にあるのは)

Sanctus Terra (聖なる武器)

——グローリースード」

フィーリアがそういうと宙に裂け目ができた。フィーリアがその中に手をつ込み光の剣を取り出す。

「何！？この魔法は？空間が割れて…」

「それにこれは上級か」

(グローリースード……よし覚えた)

フィーリアは取り出した剣を振りかざし敵に向かって振り下ろしたすると剣から斬撃が飛んだ。相手にかなりの速さで避ける暇も与えず直撃した。かすかに敵が動いている。ここに張ってある結界のおかげだろう。ここにはってある結界はたとえどんなに強力な魔法でも人が死なないようになる効果がある。普通あれほどの速さの斬撃

をくらって生きていられるはずがない。

「フィーすごいね。アレ何の魔法？」

「これはですね私の『空間^{エリア}』の属性の魔法ですよ。今度詳しく話します」

カナタはフィーリアに賞賛の言葉をかけ自分の番の準備をしていた。カナタがここで負けるわけには行かないのだ。次の決勝に行くために

7話 模擬戦開始（後書き）

作「どうでしたか？うまく伝わればいいんですが…今回から次回予告でもしようかと思えます。まずゲストのカナタです。どうぞ」

カ「えゝこんにちは。カナタです」

作「これから一人ずつ回していききたいと思います。一人目ということとで今 作の主人公です」

カ「じゃあ次回予告いってみよう！」

作「お、おう。やけにテンション高いな」↑あまり着いていけないカ「だって次僕の出番じゃないですか！今回僕の出番は皆無だったし」

作「ごめんごめん。でも次はちゃんと戦えるよ」

カ「うっし、がんばるぞ」

作「じゃあこれ台本ね。はい」ピラッ

カ「♪♪♪ん？…おい作者これはいったい？」

作「…逃げろ」ピュー

カ「あっ！！まで！」

作「では次回『彼の実力は』です。アドバイス待ってます」
カ「更新は9月10日の予定です」

8話 彼の實力は（前書き）

今回は長めになっています。
ついにカナタが活躍しますよー
期待してください

8話 彼の実力は

（準決勝、大将戦）

カナタの相手は大きな大剣を持っている大男だった。

カナタは見えていた限りでは負けないと思う。父と戦っていたんだ。父は大剣を片手で振り回せるような怪力の持ち主だったから。（それにあれは大剣と言うより普通の剣のように振り回していてかなり剣速が早かった）アレぐらいでないと大剣でカナタに勝つのは難しいと思う。

「試合を始めてください」

カナタは双剣を構えた。太刀は背中に背負ったままだ。カナタの双剣の構え方は独特で、両方の剣を逆手に持っている。

大男が走りカナタの目の前でその勢いのままに切りつけたクロウと同じ手だ。カナタはそれを左によけ右の剣で相手の腹を切りつけた。ぐうう、とうめき声を上げるが持ちこたえたようだ。すかさず2撃目を左の剣で繰り出す。しかし相手もここまで来れた奴だ、そう簡単にはいかない。剣の腹で攻撃を防ぎそのまま押し返してきた。その行動を利用し僕はいったん距離を取る。

そしてまた最初のように構える。すると相手がまた走ってきた。同じような手で簡単によけられるとカナタは思った。しかし相手は剣で横からなぎ払ってきた。少し驚いた様子のカナタであったが大振りのためよけるのは容易だった。カナタはそれをよけると後ろに下がりが低く構えた。カナタ修行中に編み出した技を使うのだ。カナタは相手がいるところめがけて走り出した――

「二刀流——絶影」
ゼツエイ

走り抜けると同時に両方の剣で目に留まらぬ速さで相手を切る。相手は大剣で僕の剣を防ぐことができず剣が体に当たる。相手は声を出すことすらできずに倒れた。

その動作に影すら出来ず相手の命を絶つことから絶影と呼んだ。今回は死なないけどね

「試合終了」

カナタは勝った。相手の男は悔しそうにベンチに帰っていった。カナタもベンチに戻った

「お前強かったんだな」

「僕が弱いと思っていたような言い方はしないでくれよ」
(まだ本気出してないんだし…)

「思ってたし……まあお疲れ」

「カナタって強かったんですね。知らなかったです」

「私もここまで強いとは…」

「フィーリアたちまで……」

(僕ってそんなに弱そうだったんだ……)

カナタはがっくり肩を落とした。

だがしかし今回でカナタはある程度挽回はできた……はず……次はついに決勝だ。相手はここまで来ると強くなってくる。でもここまでなんでこんなに弱い奴らしかない？ いえいえカナタのチームが強すぎるだけ。まあ決勝だし強いと思うが。

く決勝く

「クロウ頑張れよ」

「おう勝って来るぜ!!」

頼もしい限りだ

相手はずいぶん小柄な体つきだがあれはカナタと同じタイプのようなだ

「試合を始めてください」

相手は片手半剣。クロウは今回はどう出るか見ていくようだ。相手はいきなり切りつけてくる。クロウは剣の腹で押し返したが連続攻撃を仕掛けてくる。クロウはガードを崩され腹に剣が当たった。

「ウォーターボール！」

すると相手は下級魔法を使ってきた

クロウは詠唱破棄の魔法をくらい、その後の追撃もくらってしまい倒れた。

「負けた…魔法を使って来るとは……」

「気にするなあと3人勝てばいいだけだ」

「そうです、まだ勝てます！」

「次は私ね！ 仇討ってくるよ」

そういつてシャルルはベンチから出て行った

「それでは試合を始めてください」

シャルルは足につけていた銃を抜き構えた相手の武器はレイピアというとても細い剣だった。

シャルルは魔法を唱え始めたシャルルが見せた最初の魔法と同じものだ。

「N o c e n t Q u a e (害をなす物)

n o s N o n T a n g e t i s C a n (我に触れること
できず)

O r b i l i u s M a g i s t e r D e c l i n a t (その
軌道は防がれる)

——アンチウォール」

シャルルの詠唱が終わった。そのとき相手のレイピアがシャルルを切りつけた、がシャルルに当たることなく弾かれる。シャルルの前に発生した魔法の壁により軌道が弾かれたのだ。シャルルは両手に持った二丁の銃で相手を撃った。敵は至近距離で当たった弾丸に耐えることができずに倒れた。

「勝ったよ」

「お疲れ」

「魔法すごかったですね！アレは何の魔法ですか？」

「アレは反^{アンチ}って魔法だよ」

「へえみんなすごいのもってるな」

次はフィーリアだ。相手は片手半剣。遠距離や刀の武器は珍しいのかな？

「さっさと終わらせてしましましょう」

「試合を始めてください」

するとフィーリアは魔法を唱え始めた

「Zeit Wir Manipulieren（時間よ私が操ろう）

Die Zeit Steht Still（時間は止まり）

Welt Aufhort（世界が止まる）

Move Is Xe Just（動けるのは私だけ）

——タイムヌーラ」

フィーリアの唱えた魔法は『時』属性の魔法で世界の時が歩みを止める魔法。ただし自分より格下の相手にしか通じない技だ。

「へえ〜フィーリアは時属性の魔法か」

（！なぜ動けるんですか？まさか…）

「カナタも時属性？」

そうそれと同時にこの魔法は『時』の魔法を使える物には通じない。が時の魔法はそんなに多くの人は持つておらず、かなり珍しい魔法だ。これはカナタが時の魔法を使えるか、フィーリアよりも強いかの二つしかない。

「それは違う。僕は……いやこの話は今度しよう。ずっと止めているのはきついだろ」

この魔法は確かに時を止めている間ずっと魔力を使う魔法だ。

（じゃあカナタはやはり私よりも…）

「…分かりました。新月我流剣技万月」

この新月我流剣技はフィーリアが独自に作った技で少ない時間でより多く切ることができる技だ。フィーリアは何回も切る。だが時間は止まっているため相手は一瞬で何回もきりつけられるような感覚のはずだ。

そして切り終えて剣を鞘に収めてもとの位置に戻る。そして――

「――エンド」

フィーリアがそういうとまた時は行進を始める。相手は攻撃が当たったのも分からずに倒れる。私の勝ちです。

「!!なにをしたんだ?全く見えなかったぞ」

「フィーすごいすごい」

「じゃあ僕の出番だな」

そういつてカナタは試合に向かっていきました。フィーリアの魔法は追々話すことになるので

カナタがフィールドに出てすぐ

「ぐああ!」

(カナタが…負けた……!!?)

8話 彼の實力は（後書き）

作「はい、どうでしたか？ぜひアドバイスをください。今回のゲストは今作のヒロイン、フィーリアです。どうぞ」

フ「こんにちは。フィーリアです。読んでいただきありがとうございます」

作「…作者よりも作者らしいこと言うね…」

フ「じゃあ作者がしっかりしてください」

作「カナタ倒れちゃったよ！そこは心配しないでいいの？」

フ「はい、私はカナタを信じてますから」

作「そうですか…では次回『戦いの結末』」

フ「更新は10月18日です。ぜひ見てください」

9話 戦いの結末

「決勝戦、大将戦一回目」

フィーリア「カナタ!!」

カナタが負けてしまった。

相手はカナタと同じ2刀流た。構えは違い普通の二刀流。カナタも刀を抜いた。

二人がタイミングを計ったように同時に走り出した。そこでカナタが詠唱破棄の中級魔法をくらってしまったのだ。そして倒れてしまった。カナタは悔しそうに戻って来た。

「ごめん…次はもうちょっと本気でやってくるよ」

今まで本気じゃなかったのかよ

「カナタ…無理しないでくださいね」

「期待して待ってるぜ」

「頑張ってください!」

そこは誰もつつこまないんですね…

カナタは回復魔法の使える先生に回復してもらいすぐ向かった。もちろん相手も回復してもらっていた

（くそっいきなり詠唱破棄の中級魔法かよ。卑怯…ではないか、ル

ールはないからな。」

カナタはかなり悔しがっていた。次は負けない、と意気込み試合に向かった。

「では始めて下さい」

その審判の合図でカナタは初めて背中 of 太刀を抜く。構えは剣道と同じ両手で持って手を胸の前に持ってくる。

相手はさっき同様双剣を抜く。相手は走ってきた。カナタは動かない。目の前に来た相手の剣を一本の太刀で器用に捌くそして隙ができたところで突く。相手の服にかすったようだ少し破れた。そこで相手はカナタの剣を弾き両方の剣で切りかかる。カナタは避けるがこっちも当たってしまったらしい。カナタの服も少し破けてしまった。そして相手の剣と僕の剣が当たりつばぜり合いになる。そこで相手は距離を置き魔法を唱える

「Deserit Gurges hostis Ex (木の葉渦
巻き敵を切れ)」

Quod ventus (その風に乗って)
——リーフストーム」

「Nos Custodi (我を護りし)
fulminamurum Lorem (雷の壁よ)
——雷壁」

相手の手から出た木の葉の竜巻を雷の壁で相殺する。
そこに爆風が起きる。

次はカナタの番だ。爆風がやみ僕は詠唱を始める

「Imagination And Creativity (私の想像を創造し)」

Deines Gegners Form Steal (相手の形を奪え)

——サンダーランス」

「Werden Sie Unser Schild (我が盾となり)

Uns Stellen Sie Sich Vor (私の前に立て)

——ウッドシールド」

相手も中々やるようだ。

カナタの出した雷の槍は相手の前に出た木の盾に防がれ消えてしまった。防ぎ終えるとその木は消えてしまった。魔法は一時的なものでたとえ物体でも役目を終えると消えてしまうのだ。

「お前やるなあ。名前は？」

「カナタⅡアクリムだ。お前は？」

「ワイか？ワイはハヤテⅡフリードや。覚えとき。ほな、ワイの一番強力な魔法いくで」

そういうとハヤテは詠唱を始めた。カナタも今もっている最大の攻撃魔法を詠唱する。

「Folia Gurges (木の葉渦巻き)」

「Fengshen Pretium (風神の暴風)」

「Ramus Inliciens (大枝揺れる)」
「Tonitruixunlei (雷神の迅雷)」

「Silvarum Deus (森の神は)」

「Haec (合わさりて)」

「Sed Latus (我に味方する)」

「Nos TENCHI Versace (我天地を征す)」

「——新緑の神撃!!」

「——風雷の轟き!!」

枝や木の葉が向かってくる。その光景はまるで森の神が怒り狂ったように：激しく、炎さえも消してしまうのではないかと思えるぐらいの凄さだ

しかし雷を帯びた暴風は音を立てて向かってくる枝や木の葉をなぎ払う。カナタに向かう木の葉や枝は途中で失速するか焼け落ちてしまふ。しばらくは持っていたものの次第にハヤテは押されていき：

そして——

「完敗や、あんさん強いなあ」

そういつてハヤテは倒れた。

（優勝は僕たちだ！！！！）

カナタの意識がもったのはそこまでだった。

9話 戦いの結末（後書き）

ふう。いかがでした？短めですが勘弁してください。ここが一番切りやすいんです。

やっぱりうまく書ききれてないですね。もっと文章力を：

あ、キャラ紹介は今度からここですることにします。今回初登場のハヤテはつと

——ハヤテⅡフリード ♂ 1年2組——

カナタと決勝の大將戦で戦った。木の魔法を使う。武器は双剣を使う。中級までの詠唱破棄ができる。

しゃべり方に「ゝなんや」「ゝやで」といった特徴がある。

では今回のゲストはクロウです。どうぞ！

ク「うっす！」

作「今回はどうだった？」

ク「出番がなかった…」

作「まあまあカナタ意外そうなんだから」

ク「それに俺の魔法だけちょっとアレじゃないか？みんな強いのに」

作「これから強くなるんだから」

ク「そうか。それなら…じゃあ次回」

作「ええ、次回『魔法の紹介』」

ク「わかりやすいタイトルだな。更新は10月28日っつゝことで」

作「ぜひアドバイス、感想等がありましたらよろしくお願いします」

10話 魔法の紹介（前書き）

すいません。1日遅れてしまいました。以後気をつけます。

10話 魔法の紹介

「????」

「知らない天井だ。」

カナタが起きた時まさに見知らぬ天井があるのに気が付いた。次に思ったのが、誰かが手を握っている。ということだった。カナタは握られている右手の方を見て驚いた。

「!フィーリア!」

カナタの右手を握っているのは寝ているフィーリアだったのだ。

「フィーリア起きて! もう朝だよ」

「ふあい。おふあようございましゅ」

フィーリアは寝起きでまだろれつが回っていなかった。カナタは苦笑して手を離してくれるように頼んだ。

「!! すいません! 忘れていました」

フィーリアは手を握っているのを忘れていたらしく、顔を真っ赤にして恥ずかしがっていた。カナタはここが保健室だということに気づいたらしく先生を探していた。すると保健のヴィヴィーア先生が来た

「お…起きたか。全くあまり無茶するんじゃないぞ。究極魔法を

まだ少ないその魔力で使うなんて…今回は気絶だけで済んだが下手すれば死ぬことだってあるんだぞ。仲間に心配なんてかける物じゃない」

この世界では魔力は生命力の源なのだ。魔力が完全に無くなって死ぬこともある

「すみません。以後気をつけます」

「うん。これからがんばれよ！」

そう言ってヴィヴィー先生は保健室を後にした。

「じゃあ僕らも食堂に行こうか」

「そうですね。行きましょう」

カナタ達も保健室を後にした。

（食堂）

食堂に続く廊下でクロウとシャルルに会いそのまま一緒に食堂に入った。

カナタは優勝賞品だった武器をクロウからもらっていた。

「で、カナタは大丈夫だったのか？」

「ああ、魔力の使いすぎだそうだ。心配かけて悪かったな」

「カナタが大丈夫だったんなら別に良いよ。私達も一応お見舞いしていたんだよ」

「シャルル達は何時までいたんだ？」

「私とクロウは11時ぐらいまでだよ。で、先に帰っちゃった。でもまさかフィーが朝まで看病しているなんてねえ」

シャルルはフィーリアを茶化した。すると

「こらシャルル!!」

フィーリアは恥ずかしそうに顔を真っ赤にしながら、シャルルを怒った。悪いけど全然怖くない。

「まあまあ。あ、そくだみんなで魔法の紹介をしない？」

すると真面目に戻ったフィーリアが

「そうですね。今後もこのチームでやって行くわけなので教えておいたほうが良いです」

「じゃあ昨日の試合の順番で良いな。俺からするぞ。

俺の魔法は『力』^{パワー}という属性だ。基本能力は、筋力強化。詠唱をすると自分や味方の能力を上げることができる。つとこんなもんか」

基本能力とは詠唱をしなくても使えるその魔法の基となる能力だ。この基本能力は強力な物になると無いものもある。

「へー意外とサポートにも向いているんだね」

「ほー。じゃあ次シャルル」

「はーい。私の魔法は『反^{アンチ}』って魔法で、基本能力が下級魔法の自動相殺。で詠唱をすると、敵の魔法や打撃攻撃を相殺したり跳ね返すことができるよ。」

「そんな能力だったんですか。驚きました」

「す、凄い能力だな」

「フフッ、カナタの方が凄いと思いますよ？」

「フィーリアに言われても…ねえ」

「俺の魔法よりみんな凄いだと…俺の魔法が霞んで見える」

一人だけ嘆いている奴がいるが気にしない方向で…

「じゃあ次は私ですね。私の魔法は『時^{タイム}』と『空間^{エリア}』です。基本能力は無いんですが詠唱をすると先のことが分かったり、時間を止めたり、空間からものを取り出したりできます」

「！！！！『空間』は分かっていたけど『時』まで！？凄いチートじゃない」

「こんなんデチートといったらカナタはどうなるんでしょう？」

「何！カナタはこれより凄い魔法なのか？」

「まあそうなるわけだが…」

「これより凄い魔法って何なの？私見当付かないんだけど…」

「じゃあ最後に僕の魔法の説明をする。僕の魔法は『世界』^{ワールド}と呼ばれるものだ」

「「「!!!」その魔法は（何だ？）（何ですか？）（何？）」「」」

見事に全員ハモった。カナタは苦笑してから続けた

「まあ知らないのも無理は無い。この魔法は数百年に一人しかいないといわれる魔法らしい。基本能力は記憶力が良くなること。かな？」

「あれ？意外としょぼい？」

「ほらあゝフィーリアがハードル上げるからあ」

「まあまあ。それだけじゃないんだろ？」

「そうだけどさあ」

これで終わったら完全に名前負けだ。この魔法の凄いところはここからなのだ。

「この魔法には固有の詠唱は2つしかない。どちらも究極魔法だがその内の一つに『世界の眼』という物がある。これはこの魔法の発動中に見たことのある魔法は全て使えるようになる」

「うわゝかなりのチートだね。戦っている相手の魔法を返せるとか…」

「カナタとは戦いたくないな…」

「チートなのは分かっていたましたが、ここまでとは…」

みんなあなたの魔法を聞いて凄引いてしまった。そのぐらいチートな魔法なのだ。普通1、2種類の魔法しか使えないのに全部の魔法を使えるようになる可能性があるのだ。

「ちよっ…みんな引かないでよ！これは生まれつきで仕方ないんだよ」

「分かってる。冗談だよ、冗談。なっ？」

「もちろん」

「ふく助かった。あ、そういえばこれはあんまりばれない方が良さみたいだから僕が使う魔法は『風』と『雷』ってことで」

「「了解！」」

「で、カナタがあんなに強いのは残りのもう一つの固有魔法のおかげってことですか？」

「うーん、もう1つの魔法のことはまだ言えないかな。その魔法はまだ使っていないし」

「じゃあ何であなたはあんなに強いのか？」

そう率直な疑問を投げかけてくるシャルルにカナタは、僕は強いっ

もりは無いんだがなあ。とか何とか言いつつもこの世界に来たときのことを話し始めるのだった。

10話 魔法の紹介（後書き）

—ヴィヴィー—アルベリア ♀ 能天使———

この学校の保健の先生を務める。治癒魔法に長けておりかなり直すのがうまい。魔法薬も心得ている。意外と厳しい

身長162cm

体重??

作「さて紹介も終わったところで今日は誰を呼びましょうか？みんな出しちゃったしなあ」

?? 「フッフッフ私がいるではないか」

作「あ、あなたはゼノン校長」

ゼ「あー校長はやめて欲しいな。なんか年寄りに聞こえるじゃないか」

作「え・・・ゼノンさんは何歳なんですか？」

ゼ「私は48歳だよ」

作「……」

ゼ「ちなみに私は4代目ギルドマスターだ」

作「だそうです。彼はしばらく出番は無いので頭の片隅にでも置いておいてやってください」

ゼ「ちょ、しばらくってどれくらいだ？出たいんだけど…」

作「まあまあ。じゃあ次回『衝撃の事実』です。さて何が衝撃なのでしょうかな？」

ゼ「投稿は11月10日です。お楽しみに」

11話 衝撃の真実

（食堂）

カナタは、「今からする話は内密に」といってから話し始めた。もちろんカナタの身の上を。

「まず僕はここにきたのはつい最近だ」

「『ここ』といいますと？」

「この世界『レーヴァン』のことだ」

「！！じゃあカナタはあっち側『ルライダ』から来たってのか」

ルライダ

これはカナタのもといた世界のこと。魔法がない世界。総じて魔力を持つ人間はいない。レーヴァンとの交流はないがレーヴァンの人間がルライダに来ることもある

「カナタは魔力はあるよね。あっちの人って魔力無かったはずじゃ…」

「それは父さんと母さんがこっちの人で魔力を持っているからだよ。もともとこっちに居ただけであっちに行ったんだよ」

「一体何のために？」

フィーリアは疑問を問いかけた。普通はそう思うだろう。ルライダではこちらのレーヴァンと違って魔法を無闇に使ってはいけないのだ。

この世界の魔法とは空気中の魔力を一回自分の体内に入れ人間が使えるように変換してからその魔力を使うのだ。これは例外なくどの動物でも同じ。魔力は空気中に魔力が含まれているところにいけば自然に回復していくのだが時間がかかる。だからこの間のカナタのように魔力切れで倒れることもあるのだ。だがルライダーには魔力がない。そのため魔力が回復できないのだ。そんなこっちの人間からしたら不便なところに好んでいく人はまずい無いのだ。

「気にしない気にしない。話、続けるよ。この世界に来てから学校に入るようになったんだけどまだ魔法とか使ったこと無かったから特訓しようってことになったんだけど、そこであの鬼が…」

「『鬼』ですか」

「鬼といっても父さんのことなんだけどね。特訓の内容がね凄かったんだ…あんなのやるくらいなら死んでしまいたいって思えるくらい…」

それにカナタは実際に何度か死にかけたこともあった。まあそれを乗り越えたからこそここにいるんだけど。

「だから鬼か…カナタの父さんは凄い人なんだな」

「うん、常識が通じないから。真剣も持ったこと無かった僕を1ヶ月で戦えるまでにしたんだから」

「1ヶ月！いいえ、そもそもカナタは真剣を持ったことがなかったんですか？あれはちよっと特訓をしたところで身につくようなものじゃなかったですよ！」

カナタの動きを見た人ならそれは誰でも分かるだろう。シャルルもクロウもそれが分かってるようだった。それにフィーリアは自分より強い相手が1ヶ月特訓をして身に付いた物だと知って驚いているようだった。

「そりゃあ木刀ぐらいは持ったことあるけどルライダーでは真剣なんてそもそも少ないんだよ」

「はっ!! そういえばカナタの名前ってカナタⅡアクリムだよね」

そこでシャルルは何かに気がついたように声を上げた。名前の確認だったが真剣にカナタの返答を待つことからこれは重要なことだとわかる。

「ん? そうだけどそれがどうしたの?」

「もしかしてかなたのお父さんってもしかしてリオンさんじゃない?」

シャルルはカナタの父の名前を出した。カナタはなぜ父の名前が出てくるのか不思議そうにしていたのだが、他の二人は納得して、

「え? そうなんですか?」

「それなら納得できるな」

などと言っていた。

「え? 何で父さんの名前知ってるの?」

カナタは不思議そうにしながらもシャルルに聞き返した。

「知ってるも何も、リオンさんといえば数少ない熾天使の一人じゃないですか」

「しかも最年少の熾天使で今では『焰砂エンサのリオン』という二つ名まで持ってる凄い人ですよ」

二つ名とは熾天使の中でもより強い人と、偉業を成し遂げた者に付けられる。リオンは最年少の熾天使という偉業を成し遂げ、さらに強い人にも入っているのだ。

「何いー！！父さん！そういう大事なことはちゃんと覚えて何度言ったら…」

「アハハ…じゃあカナタはリオンさんの息子だから強いんですね」

「んーそういう訳でもないと思うんだがなあ」

「でも実際そうじゃない」

「そうですよ。…そういえばカナタの魔法のもう一つの魔法って何なんですか？」

「もう一つの魔法か…今度使ったときに教えるよ。楽しみにしてて」

「むーカナタの魔法だからチートなことには変わらないんだろうが…気になるな…」

「僕の魔法はそんなにチートじゃない！」

「あんな魔法を教えた後じゃ説得力無いですよ」

「ですよね〜……」

「まあ、そろそろ最初の授業が始まるしもう教室に行かないか？」

周りを見ても先ほどまでいた生徒達はもうすでに移動をしているようだ。食堂にはカナタ達と寝坊をしたのであろう生徒だけしか残されてはいなかった。話に夢中になりすぎたようだ。もう本来の話しなかったことは終えたとカナタ達は食事を片付けた。

「じゃあ行こうぜ〜」

そんなことを言ってカナタ達は食堂を後にした。今日は最初の授業があるのだ。カナタは勉強を粗方リオンに教わっているのでおそらく問題は無いだろう。問題はシャルルのようだ。「授業」という単語が出て来たとたんにとっても嫌そうな顔をしたのだ。そんなことでこの先大丈夫なのだろうか？

11話 衝撃の真実（後書き）

作「はーい、どうでしたかーまだまだ文章力が足りませんね…セリフとセリフの間が埋まらない…まあそのうち何とかなる、かな？」

？「そんなんじゃないつまでも変わらないと思うのだが」

作「わっ、君は次回でしようが、一回速い」

？「む？そうなのか？どこの漫画で言ってたぞ『速いのはいいことだ』って」

作「そ、そんなセリフがあった漫画も持ってるけども、君は次回『新たな仲間』で紹介です」

？「次回は11月20日でいいんだな」

作「そうだ。じゃあそれまで」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2959w/>

栄光の天使～Bridge between two worlds～

2011年11月14日18時31分発行